

研究 成 果 報 告 書

(ふりがな) はせがわ てつ

氏 名 長谷川 哲

現 職 (所属名、職名等) 新潟県立東新潟特別支援学校 教諭

修了又は卒業年月、専攻又は専修コース名 2018年3月修了 障害児教育コース

研究テーマ：自主研修会における特別支援学校教師の自立活動の指導に関わる力量形成の実態

I 問題と目的

古川 (2016) は、自立活動の授業では、指導目標や指導内容の設定における教師の裁量が大きくなることから、教師の力量に大きく左右されると述べている。加えて、先行研究等から 1 年先の子供の姿を見通す難しさや大学のカリキュラム上の課題から、自立活動については現職研修がきわめて重要であると述べている。現職研修には、(1) 法定研修、(2) 教育センター等での (1) 以外の研修、(3) 校内研修、(4) 自主研修がある (今津, 2012)。このうち、多くの教師が最も身近に受講している研修が校内研修である。しかし、安藤 (2015) は特別支援学校では、毎年、異動により人事の流動化が顕著であるため、複数年にわたる研修計画が立ちにくく、研修成果の積み上げが困難な状況であり、基礎的な研修を毎年のように繰り返されることも観察されるという課題を挙げている。このことから、自立活動の専門性を身に付けていくためには現職研修、とりわけ私的な関心に基づく自主研修が重要であると考えられる。

新潟市周辺地域では、2017 年から新潟自立活動研究会という自主的な研修会が再発足した。若手から熟練教師まで様々な年代の教師が集まり、実態把握図 (安藤, 2001) 作成や事例検討会などを年に 5 回程度行っている。さらに毎年 8 月に開催される上越自立活動フォーラム、2 月に開催されるつくば・上越・新潟合同自立活動研究会に参加し、他地域の教員との研修も深めている。

本研究では、本会参加者が、本会でどのような気付きや学びを得ているのかを明らかにする。このことで、自主研修の場である本会が、特別支援学校教師の自立活動の指導に関わる力量形成において果たしうる役割を検討するための基礎的知見を得られると考える。

II 方法

1 対象

知的障害特別支援学校教諭 (採用 2 年目)

2 方法

- 1) 参会後にアンケートに記入してもらう。
- 2) アンケートや研究会発表資料などをもとに気付きや学びの変容を分析する。

III 結果と考察

自立活動は、特別支援教育の中核を担う指導領域である。自立活動の指導を行うに当たっては、児童生徒一人一人の教育的ニーズを捉え、学習上又は生活上の困難を主体的

に改善・克服していく必要がある。

新潟自立活動研究会においては、児童生徒の教育的ニーズを的確に把握し、よりよい授業実践ができるように、安藤（2001）が提唱する実態把握図の作成と修正をワークショップ型研修として取り組んだ。対象者である教師は、実態把握図作成・修正のみならず、その後の指導についても毎回研究会にて報告・検討を行った。以下は、このような研究会活動後に対象者が回答したアンケートをまとめたものである。

1 参加の意義の捉え

アンケートの結果を表1、2にまとめた。

表1 参加して良かったこと

5月	<ul style="list-style-type: none">・実態把握図を作成できたこと。・（今までの捉えより）少し違ったところに根本となるものが見えてきた。・できていることと絡めて改善していけそう。
7月	<ul style="list-style-type: none">・実態把握図の見直しにより、子供の成長を客観的に見ることができた。・今後の課題に迷う部分もあった。・今後も実態把握図を基に子供と向き合っていきたい。
10月	<ul style="list-style-type: none">・実態把握図の見直しにより、実態を把握するだけのものだったものが実態から支援を導き、改善していけるものになった。

まず、「参加して良かったこと（表1）」を概観すると、5月は新学期から約1か月間、対象者が見てきた児童の捉え方と異なる新たな捉え方を発見している。子供の実態から指導すべき中心的な課題が見えてきたことで、指導の改善事項が明確になったのではないかと推測する。さらに7月には、実態把握図（安藤，2001）を修正する中で、子供の成長が客観的に見え、指導に対する自信につながった部分となかなか成長が見えない部分に対する指導への迷いが混在していたのではないかと考える。10月には、実態把握図（安藤，2001）を基にした指導や支援が有効であることが確信に変わったのではないかと読み取った。研究会での事例検討の際には、集団参加が難しく、好きな活動を始めるとなかなか終わることができない児童がその行動を改善できたという発表があり、結果としても実態把握図（安藤，2001）に基づく指導が成果として表れている。

安藤・丹野・佐々木・城戸・田丸・山田（2009）が述べている支援の提案から言えば、実態把握図作成や研究会会員の助言は、児童生徒の困難に対する気づきを促す支援や困難の要因を明らかにする知識の提供、支援に関する情報提供があったと考えられ、研究会における支援が力量形成に関与したと言える。しかし、指導に対する迷いや不安は現在も抱えており、今後も対象教師に寄り添いながら子供の捉え方や指導の在り方を考えていくといったサポートが必要である。

2 研修で得た知識の活用に関する捉え

次に、「今後の実践で役立てたいこと（表2）」を概観すると、周りの教師に発信し、共通理解を図りながら、協働していこうという内容の記述がある。このことについて、対象者にインタビューをしたところ、本研究会で学んだことや考えたことについて、機会を見ながら発信しているとのことだった。しかし、実態把握図（安藤，2001）を協働

表2 今後の実践で役立てたいこと

- | | |
|-----|--|
| 5月 | ・ 今日見えてきた中心課題や手立てを学級担任に話して実践すること。
・ 学級担任にも良さを実感してほしい。 |
| 7月 | ・ 自分の思考を形にすることを大切にしていきたい。
・ その思考についていろいろな先生から意見を聞きたい。 |
| 10月 | ・ 研究会のA先生の助言から、なぜ今この子はこうなのだろうかと少し距離を置いて考えながら見ていきたいと思う。 |

して作成するまでには至らなかった。その理由について聞くと、労力や時間的なコストを考えると提案しにくかったと述べていた。

安藤（2001）は、個別の指導計画作成を職務の周辺性と捉えるか中心性と捉えるかでその多忙感が異なると述べている。加えて、個別の指導計画作成の明確な目的が教師間で確認、共有されないと多忙感だけが強化され、形骸化を招くことを懸念している。個別の指導計画作成には、説明責任、学習活動の活性化、自己教育力の向上などが目的としてある（安藤，2001）。本研究会においても、今一度この目的を確認し、児童生徒ための実態把握図、個別の指導計画であるこの作成作業は職務の中心性であることを強調していく必要がある。そのためには、教師間の協働による職務遂行が必要となることも伝えていかなければならない。

この教師間の協働に関して、安藤（2007）は特殊教育が培ってきた専門性の一つにティーム・アプローチのノウハウがあり、ティーム・アプローチの成果と課題を考究して、特別支援教育、あるいは通常の教育に移転可能なモデルの構築が期待されると述べている。今回の対象教師のみならず、実態把握図作成後にどのように同僚の教師たちと協働を図っていったかをさらに追跡していくことでティーム・アプローチ・モデル構築の視座が得られるのではないかと考える。

以上ことから、自主研修会（新潟自立活動研究会）で実態把握図（安藤，2001）を作成することによって特別支援学校教師の自立活動の指導に関わる力量形成、特に子供理解に関する力量において好影響があったと考える。今後は、前述にもあるように研究会での学びが自校でどのようにティーム・アプローチに生かされているかというティームとしての力量形成にも目を向けていきたい。

（文献）

安藤隆男（2001）自立活動における個別の指導計画の理念と実践－あすの授業を創造する試み－。川島書店。

安藤隆男（2007）特別支援教育に期待する－確かな専門性に裏打ちされた指導をめざして－。季刊特別支援教育，No. 26，8-11。

安藤隆男・丹野傑史・佐々木佳菜子・城戸宏則・田丸秋穂・山田彩乃（2009）通常学級に在籍する脳性まひ児の教科学習の困難さに対する教師の気づき。障害科学研究，33，187-198。

安藤隆男（2015）自立活動の専門性の確保において現職研修が必要な背景。新重複障害教育実践ハンドブック。全国心身障害児福祉財団。

古川勝也（2016）教育センター研修の実際と展望。自立活動の理念と実践－実態把握から指導目標・内容の設定に至るプロセス－。ジァース教育新社。

今津孝次郎（2012）教師が育つ条件。岩波新書。